

平成 20 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520062

研究課題名（和文） イメージ分析に対する生命形態学の影響をめぐる思想史的研究

研究課題名（英文） HISTORICAL RESEARCH ON THE INFLUENCE OF MORPHOLOGY ON THE IMAGE ANALYSIS

研究代表者

田中 純（TANAKA JUN）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：10251331

研究成果の概要：美術史における「様式」概念が、形態学的思考の共通性を通じて、ナチュラルヒストリー（博物誌／自然史）の「種」概念と密接に関係しながら形成された歴史的経緯を考察し、「様式」の生成変化をめぐる新たなパラダイム成立（リーグルやキューブラー）や様式史からイメージ分析への転換（ヴァールブルク）と、進化論思想との関係を明らかにした。さらに、美術史とナチュラルヒストリーのこうした照応を背景として、「生命」や「進化」のイメージが生み出される想像力の論理を解明した。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2006 年度 | 1,400,000 | 0 | 1,400,000 |
| 2007 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2008 年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,500,000 | 630,000 | 4,130,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：比較思想史、美術史、自然史、形態学、進化論、イメージ、生命論、想像力

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、平成 12～14 年度科学研究費基盤研究（C）「イメージとその記憶の分析に関する方法論の思想史的研究

20 世紀ドイツにおける図像学の成立とその背景」において、アビ・ヴァールブルクについて研究を実施し、引き続き、平成 15～17 年度には、科学研究費基盤研究（C）「イメージ分析における形態学的方法の思想史的研究 1920～30 年代における文化科学の方法論とその背景」で、イメージの歴史的分析における形態学的方法の比較検討を行った。本研究はこの両者の延長線上で、と

くに、イメージ分析に進化論的な生命形態学が与えた影響に着目することによって構想された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19 世紀以降の自然学、生物学における生命形態変化の理論的パラダイム（生命形態学）とその図像的表現が、イメージをめぐる文化科学的分析とどのように交錯したのかを、とりわけゲーテの自然学などをはじめとする形態学的思想との関連を明確にしなが、思想史的に明らかにしようとすることにあった。これは、19～20 世

紀における進化論や生命形態学と文化科学との関係を、「イメージ」に焦点を当て、自然科学と人文科学との境界を横断して総合的に考察する試みとして構想されていた。具体的には

- (1) ダーウィンによる進化論思想やそこにおける図像およびダイアグラムの利用が、イコノロジーの創始者アビ・ヴァールブルクに与えた影響の解明、
 - (2) 「個体発生は系統発生に短縮された、かつ急速な反覆である」という生物発生原則（反復説）を中心としたヘッケルの思想が、同時代および20世紀初頭の文化科学の方法論に及ぼした影響の考察、
 - (3) 多種多様な形態の生物や発生過程の生命の図像を数多く含んだ生命形態学の著作におけるイメージの利用と、同時代以降の造形芸術の動向（アール・ヌーヴォーなど）やイメージをめぐる文化科学的研究における図像表現との関係の分析、
 - (4) 以上から明らかになった思想史的系譜を背景としたその後の理論的動向、とりわけ進化・発生生物学と文化科学の境界領域で展開されてきた研究（ゲテ形態学やヘッケルの理論を独自に咀嚼して展開された三木成夫の生命形態学、とくにそこで「おもかげ」と呼ばれている原型的イメージをめぐる理論や、ジョージ・キューブラーの『時のかたち』（1962）における事物の形態変化の歴史理論など）の総合的な比較検討と、そこで集約された方法論の将来的可能性の考察、
- という4点が本研究の目的であった。

3. 研究の方法

- (1) ダーウィンの『動物と人間における感情表現』をヴァールブルクがどのように受容し、のちの「情念定型」の概念につながるどんな感情表現のメカニズムをそこに読み取ったのかを、彼の著作やヴァールブルク研究所に残されたメモなどから分析した。
- (2) ヘッケルの思想が時代的コンテクストのなかでなぜ多大な影響力をもちえたのかという点の解明のために、文化科学におけるヘッケル思想の受容過程にとくに注目し、とりわけ形態学的方法が多方面で再評価された1920~30年代におけるヘッケル思想受容の動向を重点的に調査・考察した。
- (3) 1899年から1904年にかけてヘッケルが著わした画集『自然の芸術形態』をはじめとして、とくに水棲生物の多様で奇妙なかたちを集めた図版は、専門家ばかりではなく、一般の読者も数多く得て、アール・ヌーヴォー（ドイツ語圏のユーゲントシュティル）の美術や建築に影響を与えた。下等生物に発見されたこうした「美」は、それまでの美学における芸術美とは位相を異にしており、その点で規範的な芸術作品だけを特権化しない、

文化科学的なイメージ論の発想に通じるものである。こうした思想的コンテクストを浮かび上がらせるため、ヘッケルをはじめとする生命形態学がイメージ論を中心にした文化科学や造形芸術に及ぼした影響を追跡した。

- (4) ゲテ形態学の大きな影響のもとに展開された三木成夫の思想は、独自の視点からヘッケルの生物発生原則を復活させ、それを軸にあらたな生命論を構築している。こうした思想の思想史的な意味を、ここまで明らかにしてきた歴史的な文脈のなかで問い直して再検討した。
- (5) 考古学者・美術史家ジョージ・キューブラーの独創的な著作『時のかたち』における人工物の歴史をめぐる形態学が、生物学的な理論構成のパラダイムを背景にもっている点を手がかりとして、現在の進化・発生生物学における生命形態学と、芸術作品や建築物、あるいはイメージ現象一般の文化科学的歴史分析とが共有可能な方法論を探った。
- (6) 以上のような歴史的分析と方法論的考察を基盤として、具体的な芸術作品や学術的言説に即して、「生命」や「進化」のイメージがどのような想像力の論理によって形成されているかをめぐり、事例研究を行なった。

4. 研究成果

研究の主な成果

- (1) ヴァールブルクが探究した集団的な「表現の歴史心理学」において、ダーウィンの議論がイメージに伏在する時間性をめぐる考察に結びつけられている点に着目し、「古代の残存」を主題にしたヴァールブルクの研究が、「残存」というイメージの論理によって歴史の時間性を問い直す試みであった点を明らかにした。さらに、そこにおけるイメージ分析と歴史性ないし時間性の心理学との関連を基盤に、近年唱えられている「神経系美学」のように美術史や美学と神経科学、脳科学との接点を探る試みとして、「神経系イメージ学」の構想を検討した。
- (2) 精神病理学者シャンドル・フェレンツィや三木成夫に対するヘッケル思想の影響の分析を通して、実証的な生物学の範疇を越えた、「生命論」の言説における、系統発生を遡行するような「海への回帰」、「海への郷愁」というモチーフの通底性を見出した。
- (3) ヘッケルや生物学からの直接的な影響がない分野でも、生命論における形態学的な思考は多くの反映を残しており、単著である『都市の詩学』（2007）では、イタリアの建築家アルド・ロッシをめぐる建築・都市論から、写真論（畠山直哉論および森山大道論）、映画論、神話学、人類学、民俗学、詩学に及ぶ諸領域を踏査して、「波打ち際」のイメージによって象徴されるような、この種の生命

論的思考のトポスを浮き彫りにした。

(4) アール・ヌーヴォーにおける室内装飾と同時代のシャルコーやベルネームらの神経病理学との密接な関係性の背後に、この時代の都市経験、とくに群衆経験の影響を認め、ジンメルの大都市論やベンヤミンの『パサージュ論』、アドルフ・ロースの装飾否定論などを、都市と人間身体との相互作用を脳神経科学へと結びつける「神経系都市論」の先駆として捉える視座を開いた。

(5) ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンにおいてすでに、美術史とナチュラリヒストリー（博物誌／自然史）とが「様式」の概念を通じて接触しており、そこでは生物の「種」が「様式」に対応させられていたこと、それゆえ、ダーウィンの『種の起源』が「様式」の生成変化をめぐるモデルになりうるコンテクストがそこに存在していたことを明らかにした。さらに博物誌的な「様式」が人間の認知性向に依拠する「分類思考」に基づいていたのに対し、ジョージ・キューブラーの『時のかたち』は進化論の「系統樹思考」（三中信宏）を美術史に導入している、といった対比を見出した。

(6) 美術史とナチュラリヒストリーの照応をめぐるこうした歴史的経緯を背景として、昆虫の擬態や眼状紋と人間の神話を対応させて分析するロジェ・カイヨワの「対角線の科学」が孕んでいた可能性を吟味し、20世紀冒頭におけるグスタフ・クリムトやパブロ・ピカソによる絵画作品のイメージに読み取れる想像力の運動を、「対角線の科学」の視点から解明した。さらに、これらの分析の延長線上で、現代の生命論的な言説が駆使するアナロジーに着目し、自然科学の実証的言説のレベルと比喩的表現や具象的イメージ化のレベルをつなぐ想像力の論理を分析した。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究において得られた成果(1)および(4)は、バーバラ・マリア・スタフォードらが提唱する「神経系美学」などと同様に、神経科学と人文科学との融合をはかるものであり、国際的に見てもこれから開拓されるべき、豊かな可能性を秘めた分野である。この研究過程では、歴史家カルロ・ギンズブルグが注目した「徴候的知」の分析を精神医学者・中井久夫の認知論によってさらに発展させる考察を行ない、その成果をもとに、平成21年度からは新規の科学研究費補助金（基盤研究（C））を得て、「徴候的知」の系譜をめぐる思想史的研究」を実施している。

研究成果(2)および(3)は、さまざまな学問分野、芸術のジャンルを横断して、「生命」の

イメージを形成する想像力の論理を探ったものであり、多様な文化現象に対して統一的なパラダイムによる理解を提供している点で、文化科学研究の分野で類例をあまり見ない。こうした取り組みによる事例研究を集成した単著『都市の詩学 場所の記憶と徴候』は、多分野の学識者からきわめて高い評価を得て、2008年には第58回芸術選奨文部科学大臣新人賞（評論等部門）を受賞した。

研究成果(5)および(6)は、美術史とナチュラリヒストリーの照応を通して、歴史の方法論を問うたものであり、長期的なスパンで変容しながら残存する「情念定型」（ヴァールブルク）などの「イメージ」の歴史分析を、進化論的な思考形式のうちに定位させようとする考察である。これは、生物系統学者・三中信宏が指摘する進化論的な「系統樹思考」のほか、生態心理学者・佐々木正人が「ダーウィンの方法」と呼んで重視するダーウィンの自然観察・記述方法にも深く関わっている。この点で、ダーウィンや進化論がもたらした科学方法論上の劃期に着目する視点を、本研究も共有している。

今後の展望

本研究遂行中に得た着眼点からは、上記の通り、科学研究費補助金（基盤研究（C））の援助を得て、「徴候的知」の系譜をめぐる思想史的研究」に着手している。これは、19世紀末から20世紀にかけて、哲学、美術史、精神分析、文学といったさまざまな分野で発見され、近年の精神医学、認知科学、脳科学の研究成果との関係からも再評価されている、情動喚起をともなう「徴候的知」の系譜を思想的に跡づけ、その様態を明らかにしようとする研究である。

現在は、芸術作品に限定された特殊な「美術史」からより広汎な「イメージ学」へのディシプリンの転換が国際的に進みつつあり、「図像的転回」の名の下に、このイメージ学が人文科学全体の変容を担う可能性も指摘されている。キューブラーが提唱した系統樹思考による「ものの歴史」の方法を、本研究が試みたような方向でヴァールブルク的なイメージ分析において継承することは、こうした動向に即し、イメージの歴史的分析の科学的基礎づけに大きな寄与をなしうるものと思われる。その方法論的考察を下支えする具体的事例の分析はすでに数多く蓄積しており、2009年度内には『イメージの形態学』と題した単著として刊行される予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 11 件)

田中純「Art History と Natural History 種・様式・シークエンス」、『現代思想』、2009 年 4 月臨時増刊号、2009 年、222-234 頁、査読なし。

田中純「都市表象分析とは何か(二) 自註の試み」、『10+1』、50 号、2008 年、2-10 頁、査読なし。

田中純「多孔性の科学 生命の楼閣、都市の生命」、『UP』、425 号、2008 年、63-67 頁、査読なし。

田中純「忘却の詩学、類推の書法——アルド・ロッシの自伝的ドローイングをめぐって」、『思想』、1001 号、2007 年、154-177 頁、査読なし。

田中純「都市の詩学——萩原朔太郎のステレオ写真」、『10+1』、47 号、2007 年、2-14 頁、査読なし。

田中純「方法の生態学 ダーウィン、ベンヤミン、宮本常一」、『10+1』、46 号、2007 年、2-12 頁、査読なし。

田中純「その馬を見よ」、『UP』、413 号、2007 年、57-61 頁、査読なし。

田中純「博物誌という遊戯 驚異の部屋としての都市」、『10+1』、45 号、2006 年、2-12 頁、査読なし。

田中純「戦士の到来」、『インターコミュニケーション』、59 号、2006 年、144-152 頁、査読なし。

田中純「無縁の根源 河原という魂の市庭」、『10+1』、44 号、2006 年、2-12 頁、査読なし。

田中純「狩人たちの物語 都市博物誌の座に向けて」、『10+1』、43 号、2006 年、2-13 頁、査読なし。

〔学会発表〕(計 2 件)

田中純「Urban Poetics and Photography: Methodology and Some Case Studies」、『国際会議「For the New Urban Poetics」』、2008 年 4 月 12 日、高麗大学(韓国、ソウル)。

田中純「オットー・ヘフラーの『ゲルマン人の祭祀秘密結社』における「死者の軍勢」をめぐって—群衆論としてのゲルマン神話学」、『表象文化論学会』、2007 年 11 月 18 日、東京大学。

〔図書〕(計 2 件)

田中純『政治の美学 権力と表象』、東京大学出版会、2008 年、620 頁。

田中純『都市の詩学 場所の記憶と徴候』、東京大学出版会、2007 年、478 頁。

〔その他〕

平成 19 年度芸術選奨 受賞者及び贈賞理由 http://www.bunka.go.jp/geijutsu_bunka/souzoukatsudou/sensho/19_geijutsu_sensho

.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 純 (TANAKA JUN)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：10251331

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし